

2020年9月13日聖餐式説教

人が自分に対して何か悪いことをした場合、何回まで許すべきか、これはわたしたちの世界で身近な問題です。イエス様の世界でも同じで、律法によれば3回まで許すようにと記されていました。世界の例を見てもだいたい同じです。有名なハムラビ法典も3回ですし、教会の説教としては適切ではありませんが、日本でも、「仏の顔も3度まで」と言われています。今日はこのことを通して、私たちが礼拝の度に唱えます「主の祈り」の、「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」とはどういうことなのかを考える主日になっています。

ペテロはもちろん律法に許すのは3回までと書かれているのを知っていました。そこでペテロはそれを2倍にしてさらに1つ加え、7回と言え、いくらなんでもイエス様は十分だと言ってくれるだろうと思っていたのです。

しかしイエス様の答えは違いました。7回どころか7の70倍ゆるしなさいというのです。これは490回許しなさいという意味ではありません。7は聖書の世界で完全を現しますので、7の70倍とは、無限に許しなさいという意味になります。そしてイエス様は借金のある家来のたとえを話されました。

最初に登場するのは1万タラントン借金のある家来でした。1万タラントンとはどのようなお金になるのでしょうか。当時1日の生活に必要なお金、すなわち1日の賃金は1デナリオンでした。そして6000デナリオンが1タラントンになりますので、1万タラントンは、6000万デナリオン、6000万日分の生活費になります。6000万を365で割りますと、16万4千383年になります。すなわち、1万タラントンは16万4千383年分の生活費ということになります。日本が世界有数の長寿国と言っても90歳まで生きる人はそう多くないわけですから、16万4千383年とはどれだけのことか、私たちはもちろんのこと、当時の人々も想像をはるかに超える金額であったわけですね。

この家来が返せなかったのは当然でした。そこで主君は持ち物をすべて売って返すように命じます。もちろんすべてを売っても全部返せるわけではありませんが、この家来は自分の持ち物をすべて失うことは明らかでした。そこで必死に待ってもらえるように願います。返せるあてもないのはわかっていますが、

家来はそれしかできなかったのです。

ところが主君はその様子を見て憐れに思い、借金を帳消しにしたというのです。自分の持ち物、自分のすべてを失うしかなかったこの家来にとって、どれだけの喜びであったでしょうか。

この家来がホッとして帰っていくと、自分が100デナリオン貸している他の家来に出会います。100デナリオンは100日分の生活費ですので3か月強の生活費、わたしたちでも十分想像できる金額です。家来は他の家来を見るなり借金を返せと迫ります。しかし返せなかったので他の家来を牢に閉じ込めてしまいました。

事の次第を見ていた人々は非常に心を痛め、主君にこのことを報告します。主君は、他の家来を許すべきではなかったかと言い、借金を返すまでこの家来を牢に入れてしまいました。返すことは不可能ですので、一生牢から出ることはなかったこととなります。

この物語はたとえ話ですので実際にあった話ではありません。そしてこのたとえ話は天国のたとえ話として語られていますので、どんなことが福音として語られていたかを学ばねばなりません。

借金は罪を表していました。私たちは神様から1万タラントンの罪をゆるしていただいているのです。だから私たちも隣人に対して100デナリオンの罪を互いに許し合いなさいと語られているのです。これが主の祈りの、「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」の意味なのです。

私たちが隣人に対して罪を許すのは、神様との交換条件ではありません。そこには1万タラントンと100デナリオンの差があるのを忘れてはならないのです。そして神様から1万タラントンの罪をゆるされている私たちは、当然の務めとして、神様と結びあわされている者の責任として、互いに許し合いなさいと語っているのです。

わたしたちは「主の祈り」を礼拝の度ごとに唱えます。主の祈りは最も完全な祈りです。その中で神様の許し、隣人の許しが語られているのを、改めて覚えたいものです。そしてこれが天国の姿なのです。